

2023年9月17日 主日礼拝

説教題「恐れることはない！」 マルコ福音書 5章 35～43節

主任牧師 加藤 誠

「イエスはその話をそばで聞いて、『恐れることはない。ただ信じなさい』と会堂長に言われた。」(マルコ5章36節)。

「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。神の国の福音、良き知らせ、神の国の幸いを主イエスは私たちに手渡してくださいました。この良き知らせを受け取り、あなたの心と体をしっかりと神の恵みに向けて歩いていきなさいと私たちが招いてくださったのです。その主イエスが手渡してくださいました神の国の幸いの一つが「恐れることはない」というメッセージです。

私たちはいろいろなものを恐れます。人々の目や言葉を恐れます。そのたった一言に心が騒ぎたち、不安になります。自分のコントロールの及ばないもの、自分の理解を超えているもの、知らないものを恐れます。病気に不安を覚え、年齢を重ねて年老いていくことに不安を覚え、そして死を恐れます。「一喜一憂」という言葉のとおり、私たちの笑顔は次の瞬間にもたらされる小さな不安にあっという間にかき消されます。私たちはほんとうに弱い存在だなあと思い知らされる毎日です。

最近赤ん坊を抱く機会を与えられて感謝しているのですが、赤ん坊を見ていると、生まれて半年たってもまだ手の指先を自由に使いこなせないのですね。こんな動物、ほかにいるだろうかと思えます。チンパンジーは生まれた時から手を自由に使いこなしています。でも人間の赤ん坊は半年たっても自分で食べ物を口に運ぶことができず、せいぜい親にすがりつくことしかできない。何かを恐れて泣き叫び、母親にしがみつくと赤ん坊の姿は、人間の原型なのだなと知らされます。人間は一人では恐くて生きていけない。誰かにすがりつかないと生きていけない私たちなのです。

パスカルは『パンセ』の中で「人間は考える葦である」と言いました。「人間は一本の葦にすぎない。自然の中で最も弱いものである。だが、それは考える葦である」と。パスカルは、人間に与えられている「考える」という賜物の大切さを語ったのですが、その前提として、生物としての人間がどれだけか弱く、折れやすく、傷つきやすい存在であるかを語りました。パスカルは聖書を丹念に読みながら『パンセ』を書いたそうですが、実は主イエスが十字架の裁判を受けた時、「茨の冠」をかぶらされると同時に「一本の葦の棒」を持たされています。「茨の冠」と「葦の棒」は、愚かで弱々しい王の象徴です。何の力も持たない、頼りがいのない小さな存在として、主イエスは唾を吐きかけられ、鞭で打たれました。けれどもこの「葦の棒」を持たされたイエスこそ、私たち人間の罪を贖い、救い出す尊い力を持つ方であることを聖書は証ししています。折れやすく、傷つきやすい「葦の棒」のような私たちを最期まで守り導いて、神の恵みにつなげてくださる方なのです。

さてここに、ヤイロという会堂長がいました。当時の会堂長は村の村長のような役

割を担い、村人たちが持ち込んでくるさまざまな課題を裁く立場にありました。ヤイロも村人たちから敬意を集めていたことでしょう。けれども、そのヤイロにしてどうにも力の及ばない問題がありました。愛する娘の病気です。12歳ですから、ユダヤではまもなく結婚していく年齢です。これまで大切に育ててきて、さあこれからという愛する娘が病気のために死に直面していました。子どもの死と向かい合うことほど親にとって辛いことはありません。ヤイロとその妻の胸は張り裂けんばかりだったことでしょう。けれどもヤイロは無力でした。毎日毎日、神さまに癒しを祈り、医者たちを次から次に招いたことでしょう。万策尽きたヤイロの耳にイエスという若者の話が入ります。一体どこの馬の骨か分からない。律法学者やファリサイ派の先生たちからはすこぶる評判が悪い。そんなイエスという男に頭を下げるのか。先生たちから何と言われるかな。「あのイエスに頭を下げるような者に会堂長などさせてはおけない」と言われるかもしれない。でも、もうそんなことを言っている場合ではない。ヤイロは主イエスのもとに出かけ、その足元にひれ伏し、愛する娘の癒しを請い願ったのでした。

主イエスは会堂長ヤイロの願いを受けてくださいました。そして一緒にヤイロの家に向かう途中、想定外のことが起こります。主イエスが癒しを願う一人の女性の前で動かなくなってしまったのです。「わたしの服に触れたのは誰か」。弟子たちが「群衆があなたに押し迫っているのがおわかりでしょう。それなのに『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか」とたしなめても、主イエスは動かないのです。このとき、かすかな希望の光に津からづけられていたであろうヤイロの顔がどんどん曇っていったのではないかと想像します。「イエスさま、今はそのようなときでしょうか。わたしの娘はまさに死にそうなのです！」。ヤイロの心の中の叫びが聞こえてくるようです。そして、あろうことか、とうとう娘の訃報がもたらされたのでした。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」。ヤイロの目はすっかり光を失い、顔は土気色になったことでしょう。

しかし、そのヤイロの向かって主イエスはこう言われました。「恐れることはない。ただ信じなさい！」と。何を恐れず、何を信じろというのでしょうか。神の国は確かに来ている。神の愛があなたとあなたの家族を確かに包んでいる。自分の無力を恐れることはない。あなたの家族を襲った不幸を恐れることはない。愛娘との死による別れを恐れることはない。すべては愛なる神の御手の中にある。今、この時にも注がれている神の真実の愛を信じて、受け取っていきなさい！…ということでしょう。人々はそのように語るイエスをあざ笑いました。「茨の冠」と「葦の棒」を持たせた兵士たちと同じです。この男に、いったい何ができるのか。けれども、主なる神は「茨の冠」と「葦の棒」を持たされたイエスこそ、私たち人間を罪から救い出し、悪の支配から神の愛の支配に連れ戻し、復活の希望に生かしてくださる方なのです。私たちの小さな理解と小さな信仰を超えて働かれるイエスの「恐れることはない、ただ信じなさい」の御言葉を大切にいただいでいきましょう。

